

第281回山口西田読書会（＝2021年8月7日開催分）の Protokol

担当：佐野

【テキスト】

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集〔旧版〕第四巻、220頁14行目から221頁14行目まで（＝「場所（一）」の第8段落）

【テキスト要約】

「対立なき対象といえども、かかる意味に於ける意識の外に超越するとは云い得ない、却って此場所に映されることによって、対立なきものと見られるのである」。これはラスクの超対立的対象に対する西田の主張の核心である。

次いで「対立なき対象」の不可欠なる所以、すなわち「意義」が示される。それによると「対立なき対象」とは「我々の当為的思惟の対象」だということである。どういうことかという、「判断内容を一義的に決定する標準となる」ということである。したがって「若し我々がこれに反して考えた場合、我々の思惟は矛盾に陥る外はない、思惟は思惟自身を破壊することになる」。思惟が思惟として成り立つために不可欠な制約が「対立なき対象」だということである。

こうした対象は判断が従うべき標準として判断を超えている。したがって確かに「かかる対象を見る時、我々是对立的内容の成立する主観的意識の野を超越して外に出ると考えられる」（ラスクの所謂「判断彼岸的」）。西田もある意味でその点は認めるであろう。しかしそれは主観的意識の野を超えて真の意識の野に超越することであると見え、次のように述べる。「併しそれは対立的なる無の立場から真の無の立場に進むということに外ならない、単に物の影を映す場所から物が於てある場所に進むということに外ならない、所謂意識の立場を棄てるのではない、却って此立場に徹底することである」。

文中「物が於てある場所」とは「物の影を映す場所」ではなく「対象をありのままに映す」（221, 11-12）場所のことである。「映す」という性質がなくなるのではない。また文面からは必ずしも明らかではないが、「所謂意識の立場」を徹底することが「真の無の場所」に進むと言ってもそれは連続的になされるのではない。真の否定を介している。そのことを示すのが次の「真の否定は否定の否定でなければならぬ、然らざれば意識一般の如きも無意識と扱ふところはない、意識という意味はなくなるのである」という表現である。「対立的なる無」である観念論的な「所謂意識」が無に徹する所は無意識ではない。意識は真に無になることにおいて「対立なき対象」を映すのである。

「我々が斯く考えざるを得ない、然らざれば矛盾に陥ると云い得る時、かかる意識の野は所謂超越的对象を内に映しているものでなければならぬ」。そうしてかかる「真の無の場所」は「否定の否定として真の無なるが故に、すべて対立的無の場所に映されたものをも否定することができる」。「対立的無の場所に映されたもの」とは「物の影」である。ラスクに依れば判断（意識）における対象は「模像」であった。それがすべて否定される。そうしてそれが否定の否定としてありのままの対象（ラスクの所謂「原像」）となる。

「意識の野は真に自己を空しうすることによって、対象をありのままに映すことができるのである」。この場合、「対象が対象自身に於てあると考えられるかも知らぬ」とは、ラスクの超対立的対象のことを念頭に置いている。しかしその場合、「単に対象がそれ自身に於てあるならば、所謂意識内容の標準となることはできない」、それ故「対象の於てある場所は所謂意識も亦之に於てある場所でなければならぬ」とされる。すなわち「真の無の場所」は超対立的対象も、「所謂意識」（ラスクの意識）をも映すものでなければならぬ。

西田はラスクを含めてカント学派の哲学を本質的に「所謂意識の立場」であると考え、こうした意識を「対立的無」と呼び、これに対して対象は意識の野の外に超越すると考えられるが、ここにラスクの超対立的対象を位置付けていると考えられる。こうした意識が「対立的無の立場から真の無の立場」に徹底することで、超対立的対象も意識の野に映さ

れることになる。その際「対象をありのままに映す」ことによって、意識の野は「物が於てある場所」となる。ここに場所論の認識論的テーゼと存在論的テーゼが一つになる。その際両者を結び付けているものは「真に自己を空しうする」ということであるのに注意したい。この発想はすでに前編において「我々はいつでも全然我を没し尽して、主客合一となる所に有を見る」(107, 15) という表現に見られるのみならず、『善の研究』においても「絶対的統一はただ全然主観的統一を棄てて客観的統一に一致することに由りて得られる」(岩波文庫改版 225 頁) とあるように、必ずしも明確に自覚されていたとは言えないにせよ、初期からある発想である。